



「ここを一つに平和を宣べ伝えよう」

世界平和記念聖堂献堂50周年実行委員会 常任委員会

< 目次 >

1. お知らせ		4. 「献堂50周年を迎える祈り」	
世界平和記念聖堂のスケッチ募集 2	今月の祈り 7
世界平和記念聖堂への巡礼の受付 2	5. 資料紹介	
アルゼンチンでのラッサール神父 2	ジョン・ハーシーの「ヒロシマ」(増補版) 8
2. 聖堂建設の歴史シリーズ		6. 部会だより	
建設資金募集申し込み 3	< 総務部会 > 8
3. 「ラッサール神父」の思い出		< 霊性・典礼部会 >	
「ラッサール神父と共に働いた人たちの話を 聞く集い」(報告) 4	< 平和活動部会 >	

「復興進む街」



< 写真左 >

1946年に再建された司祭館のそばに立つ

天主公教会の門柱(1947年6月)

写真に写る二人は誰?

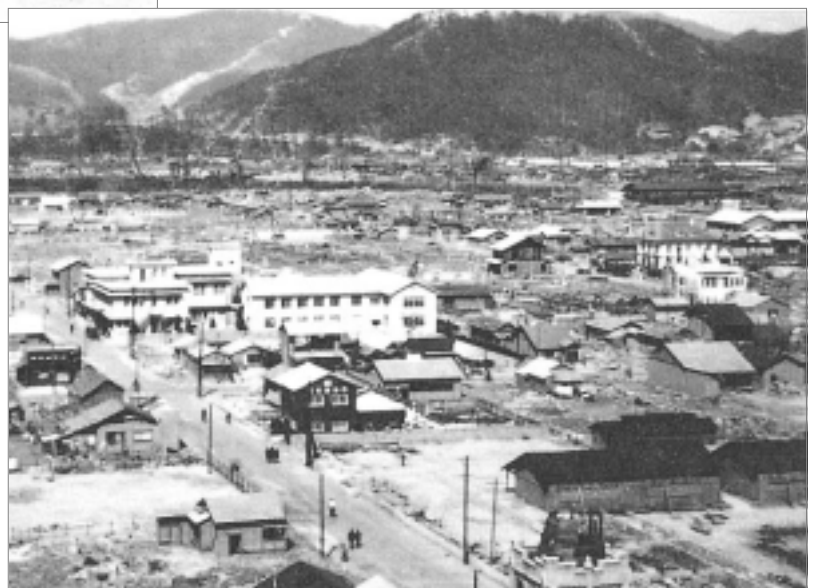
「ヒロシマの被爆建造物は語る」(広島市)より

< 写真右 >

司祭館が再建された頃の熾町の様子、
写真の右中に司祭館、左中に広島中央
放送局(NHK)、その上の方に縮景
園、右下が熾町小学校の仮校舎(現在
地に移転する前のもの)

(1947年4~5月頃)

「ヒロシマの被爆建造物は語る」より



お知らせ

平和記念聖堂のスケッチを描こう

献堂50周年実行委員会では、世界平和記念聖堂のスケッチを以下の要領で募集します。多くの方が記念聖堂に親しみを持ち、その献堂の意義を再認識していただくために、企画しました。聖堂への巡礼の際に、聖堂をスケッチしてみても、いかがですか？

募集要項

応募作品のテーマ：「世界平和記念聖堂」

応募資格：特に制限なし。

作品規格等：

四つ切画用紙サイズ以下

使用する画材は自由です。

(えんぴつ・クレパス・水彩、油絵具など)

作品は用紙一枚につき一点とし、一人何点でも応募できます。

応募作品の裏面に、住所、氏名(ふりがな)、年齢、電話番号を記入して下さい。

なお、児童、生徒の方は学校名、学年も記入して下さい。

応募作品は未発表のものに限ります。

応募の締切り：平成16年10月10日(必着)

審査発表：

最優秀1点、優秀2点、佳作10点を選び、それぞれ賞を贈呈します。

なお、参加賞を用意してあります。

平成16年12月24日 世界平和記念聖堂において、作品の展示と共に行います。

入選発表は入選者本人へ通知します。

作品の著作権等：

応募作品の著作権は、カトリック広島司教区に帰属し、応募作品は返却しない。

提出先：下記のところに郵送または持参してください。

カトリック広島司教区 スケッチ募集係

〒730-0016 広島市中区鞆町4-42

お問合せ (082)-221-6017

平和記念聖堂への巡礼の受付

世界平和記念聖堂の献堂記には、「この聖堂を訪れ、ご覧になるすべての方々は、亡くなられた犠牲者の永遠の安息と人類相互の恒久の平安のためにお祈りください」とあります。「平和の祈り」の招きに応え、記念聖堂に巡礼し、聖堂の案内を希望される方は申し込み下さい。申込書は、別途配布する予定のチラシや広島司教区のホームページにあります。

= 広島司教区ホームページのアドレス =

<http://www.hiroshima.catholic.jp/>

アルゼンチンでのラッサール神父

次の写真は、ラッサール神父が昭和21年(1946年)のヨーロッパ訪問後、南米アルゼンチンを訪れたときの写真です。1948年にはブエノス・アイレスで「HIROSHIMA」(HUGO LASSALLE,S.J. 著)がスペイン語で発行されています。アルゼンチン訪問の事実を伺い知る資料です。鞆町教会の下河内さんから資料提供を受けました。写真は、ラッサール神父を中心に写真の一部を拡大しています。

このような、ラッサール神父に関する写真や出版物、新聞記事などをご提供下さい。ラッサール神父と一緒に活動された神父やシスター、教会行事、信徒の方々などに関する情報も待っています。



(アルゼンチンの日系人とラッサール神父)

< 聖堂建設の歴史シリーズ >

世界平和記念聖堂の建設資金は、アメリカ人のブラッドレーさんからの多額の寄付で賄う予定でしたが、資金が足りず、1951年1月に「広島平和記念聖堂建設後援会」を組織し、広く企業や市民から献金を募集することになりました。当時、広島市民に向けて募金を呼びかけたパンフレットにあるラッサール神父の挨拶を原文のまま紹介します。なお、ブラッドレーさんの協力は、アメリカにいたイエズス会のアレキサンドラ神父の仲介で実現したそうです。

「原爆都市広島に平和記念聖堂」

・・・世界平和のために・・・

原子爆弾の閃光は広島を一瞬にして焔に包み、幾十万の尊い犠牲は、世界大戦の終止符として深い悲しみと共に捧げられたのであります。

あたかも、この惨禍に巻き込まれ、身をもって戦争の罪悪のいかに嫌悪すべきものであるかを血と共に体験した私は平和、それは社会正義と兄弟愛に基づく真の平和を希求する余り、この惨悲を極めた広島土地に戦争犠牲者の冥福、それは全世界の人達をも含めた、此等の人達の苦しみ悲しみが、世界平和の基礎となるようとの念願の下に平和記念教会の建設を思い立ったのであります。

硝煙漸くにして治った1946年9月、私はローマを訪れピオ12世聖下に私の前述の決意を披瀝しました所、賛意を頂き之に力を得てヨーロッパ、南米、北米の兄弟に之を訴え、私の第二の祖国日本に帰りました。勿論遠いヨーロッパの人達も南米の婦人達も亦北米の在郷軍人も広島の実情を知り、あらゆる手段を通じてその同情を示されつつありますが、世界の人々はあげて一層激しく平和への熱情に駆られノーモアヒロシマズ運動が起こされて居りますことは周知の所であります。然し愛のないところに平和は招来されるものではありません。この意味において、この教会が世界各国の人々の精神的な救いの場所となり、世界平和のシンボルとなるよう国境を超越した人々から支援され着工の運びになった所以と信じて疑いません。

1947年私の熱心なる友人であり兄弟である日

本建築界の泰斗村野先生、東京大学内藤教授、早稲田大学今井教授並びに教会設計家イグナシオ・グロッパ氏からの協力を得て準備を進めていましたが、此の間私の趣旨に賛同して世界各地から多額の浄財が寄せられ、私は神の御恵みと兄弟愛の発露として感謝の日々を迎えつつあるのであります。

然しながら2000人の人達を収容するためには、高さ18メートル、長さ52メートル、幅20メートルに高さ45メートルの塔を有し建坪376坪の鉄筋コンクリートの建築と設備を必要とし、実に6000万円の巨費を投じなければなりません。

私はヨーロッパに呱呱の声をあげましたが、今日では日本に帰化して居りますので、私は日本人の一人であり而も無力な一人であります。この大きな事業が世界各国の人から支持され先般定礎式もどこおりなく終わりました事をこよなく嬉しく思っていますが、私の同胞である親愛なる日本の兄弟諸氏からのご支援をひたすら願って止まぬ次第であります。

民族も宗教も、総てを超越し、私はこのうえは一日も早く完成して、数多くの戦争犠牲者が築いた平和の基礎を守るために祈りを捧げたいものと念じて居ります。

幸いに私の微意をお汲み取り下さいまして、世界平和の一つのシンボルとすべく、貴下の熱きご支援を戴き度く存じ居ります。

そして、この聖堂に備えられる黄金書(Golden Book)に御尊名若しくは貴下の祈りを求める方のご芳名を記録し、朝に夕べにその方々の霊を慰め大いなる祝福のもたらされる事をお祈りさせていただきます。(下線は、编者。)

小春日和の広島の一隅にて H.Lassalle.S.J.



<ラッサール神父の思い出>

3月20日(土)、「献堂の精神に触れよう」との思いで、献堂50周年実行委員会・平和活動部会の主催により「ラッサール神父と共に働いた人たちの話を聞く集い」が広島カトリック会館「多目的ホール」で、約80名の方々の参加のもとで開催された。当日のお話をご紹介します。

話を聞かせて下さった方々 順不同

野間 重信氏(廿日市教会 司祭)

津野 清次郎氏(祇園教会)

金沢 文雄氏(廿日市教会)

福間 延子氏(社会福祉法人「太陽の町」)

司会(田淵栄範氏=廿日市教会):今日は4人の方から献堂当時の話をお聞かせいただく事になりました。初めに肥塚神父様から挨拶をお願いします。

肥塚神父:世界平和記念聖堂・献堂50周年実行委員の肥塚です。『世界中で2度と戦争により、どんな小さな命も奪われてはならない』との想いが結晶された聖堂献堂の精神を学ぼうと、今年は色々な集まりを行っています。

今日は大量破壊兵器(原爆)により御自分も被爆されたラッサール神父の熱き想いと働きに接した方々の話を聞かせて頂きます。今後の私達の活動に生かして行ける様にと企画をしました。

司会:先ず最初に聖堂献堂準備委員会が設立された当初より関わられておられた、福間さんのお話を伺いたいと思います。



福間:私はエリザベト音大の学生の時、土井正夫さん(故人)に勧められ、“建設部準備係”で働くようになりました。

津野:洗礼は昭和21年にシュワイツェル神父から受けました。ラッサール神父の三次、吉田、向原への布教活動へ同行しました。木賃宿に泊まりながら、幻灯や紙芝居をしたものです。

聖堂建設の為に募金活動もしました。見栄えの良い家の方よりも、貧しそうな家の方のほうが協力的だったのが印象的です。

野間:津野さんとは満州(中国)時代の同級生でした。広島で再会した時、かれは熾町教会の青年会長だった。そして私の代父でもあります。

“50周年ニュース”に載っていたトタン屋根の聖堂で初めてのクリスマスを迎えた時、土井さんに「この戦争で亡くなった方々は、どうなったのでしょうか・・・」とラッサール神父は聖堂建設の話をした。

聖堂の建設は始まったが、おりしも朝鮮戦争が勃発し、資材、とくに鉄が高沸し資金面での先行きが危ぶまれました。信徒の有力者達は建設資金の足しにする為に個人で借金をしてでもと思っていた様でした。丁度その頃アメリカ(実業家ブラッドレー氏)より多大な資金が届き、一息ついたものです。

著書に有るようにラッサール神父は自身の精神の向上の為に禅の道を志されたようだが、日本の文化の中に禅の力が流れている事を感じとられていた。禅を続け霊的な世界での体験が深かったのでしょう。ある種の悟りの状態にまで至ったと書いてあります。同じ様な事を今の教皇も語られています。

「司祭自身が神との触れ合いを体験していなければ、神聖な任務を行う資格は無い」とさえ言われています。

金沢:私は献堂の半年前にこちら(広島)に来ました。神父は人に崇められることを好まれませんでした。カトリックの枠を超え東洋の精神をも悟られた聖人だとも思います。修練期にオランダで荻原さん(後の広島教区長)と出会ったのが、日本の精神に興味を持つきっかけとなられたようです。

司会:この辺りでラッサール神父の平和に対する想いと、聖堂建設に至った経緯などを聞かせて下さい。

福間:土井さんから聞いた話ですけど・・・、ある日、

神父さんが空を見上げて立ちすくんでおられたんだそうです。「神父さま、神父さま！」と3回呼び続けた後、やっと振り向かれ、「戦争で亡くなった人々の為にここに聖堂を建てよう！」と言われたそうです。土井さんは「あの時は幻を見られたか、神様からのメッセージを聞かれたか、何か特別なことが有った筈だよ」と言われていました。

ラッサール神父は1枚のタタミの上で寝られていた。(背丈からして、一枚では到底足りないと思い)「どうやって寝られているのですか？」との問いに「それは、上手に折りたたんで寝るのですよ」との答え。

古くて袖もほころびたスータンはツルツルに黒光りしていた。何時も質素な生活をされていました。

「伝道婦になりなさいと」勧められ、要理などを手伝うようになりました。仕事の無い時は「聖堂に行き、聖体の前に座って下さい。これは尊い仕事です」と言われました。私は一生、聖体の前に座る仕事に就きたいとの願いが有りました。今は福祉施設をしていますけど(笑)。

頼まれないのに何時も信徒の誰かが手伝っている、そんな雰囲気を持っておられた方でした。

司会：私は小学生の頃、遠くから神父を見ていたような気がします。ラッサール神父との思い出、エピソードなどをお聞かせ下さい。

津野：愛の実践者でした。・・・

司会：野間神父さんが司祭の道を志すようになったのは、ラッサール神父との出会いが関係あるのでしょうか？

野間：当時、他の教会では神父のワンマン振りが揶揄されていたようだが、ここ幟町では信徒は自由に活動させてもらっていた。

布教の為に自分たちで企画し、宮島へ行った事があります。東京から帰広したばかりのラッサール神父をジープで駅に迎えに行き(当時ラッサール神父は1年に50回近くも東京を往復されていた)そのまま宮島まで行った。

借りていた公民館で開演時間の午後7時になっても誰一人来ない。その日、最後まで訪れる人は無かった。最後にラッサール神父が「ロザリオの祈りをしましょう」と一緒に祈りはしたが、苦情は一言も

言われなかった。信仰生活の妨げにならない事なら何時も応援して下さい。

金沢：ご自分を律しておられたが、他人には寛大で「ま、良いでしょう」が口癖だった。

司祭は人格そのものよりも、秘跡を司る役の方に趣があると思うが、ラッサール神父の場合は本当に人格者であられたから、私たちは贅沢な信仰生活をおくる事が出来ました。

ラッサール神父は『知られていない事を愛する』方でした。しかしヨーロッパの講演では数千人が押し寄せたり、周りのほうが慕ってしまうのです。



司会：私の立場上、聖堂献堂の話を、もっとお聞きしたいのですが、準備の時から、皆さん「形よりも精神的なことを話したい！」と言われていましたが、献堂50周年について、お話しできますか？

福間：献堂前のことです。地下聖堂には聖体を安置し、常住礼拝のシスター方がアメリカから来られることになっていました。「一日中、聖体の前に座れるから、そこの修道会に入りなさい」と勧められました。結果は福祉施設の仕事に就く事になりましたが、この聖堂でいつも平和の為に祈る信徒の会が出来ればと今でも思っています。

津野：信仰と平和のこの記念聖堂は50年間、何を見てきたでしょうか？・・・むかし、土曜日は何時も聖体礼拝を続けていた。永遠の平和を願い、祈っていました。「戦争の無いのが平和」ではあるが、なによりも「神様の平和」を祈りたいものです。

野間：私が神学校に行ったのは昭和29年でした。その年の8月6日が、献堂式でした。その頃、大聖堂祭壇の右の香部屋には、タタミが一枚置いてあり、ラッサール神父は『祈り三昧』の生活をされていた

のでしょうね。(当時、大聖堂の祭壇中央に聖櫃があり、ご聖体が安置されていた)

それから、「この聖堂は『広島の犠牲者と世界の戦争による犠牲者の為に建てられた』のだから、市民の方々にももっと関心を持って貰いたい」とのラッサール神父の意向もあり、“献堂の趣旨”のチラシを持参し、市内を戸別訪問しました。「身内の方、知人の方に犠牲者が居られたらご記入ください。お祈りします」と、仏教でいう過去帳のようなものに記帳してもらいました。毎年、案内を出し8月6日のミサには相応の市民の方々も参列されていました。

時が経ち、復興が進むと(住所変更も多く)案内が届かない所帯が多くなったので、この案内をするのは取り止めになってしまいました。

その過去帳が今、行方不明になっていると聞き残念です。(カトリック会館建設の折、荷物移動の最中に行方不明になっており現在も探索中)

鐘楼にある4つの鐘はドイツから贈られて来たものですが、その中の1つにはラテン語で「戦争の道具たりし鋼鉄は、もはや民々を平和に招く」と刻んであります。

このように平和への願いを私たちは伝えて行かなければならない。神から受けた平和を人間は、調和を持って伝えて行かなければならないと思います。

金沢:世界の平和と幸福には、人間の思考の変革が必要ではないでしょうか。例えば宗教間の相互理解などです。ラッサール神父は、その先人だったのではないのでしょうか?。「カトリックの洗礼を授かっていなければ救われない」との論には強く反発されていました。(そういう考え方が中心になって献堂された)この聖堂の存在の意義は非常に尊く、大きいと思います。

司会:ラッサール神父の人柄に関しては短い時間で語り尽くせないと感じました。今日は4人の皆様、貴重なお話を本当に有難う御座いました。私たちも平和についてこれからも考えて行きたいと思います。終わりにあたり、献堂50周年実行委員会の責任者である深堀神父さんにご挨拶頂きたいと思います。

深堀神父:私は若かったから大人としてラッサール神父と付き合えることが出来なかった。

今日、話して下さった方々は戦後、大人として深

い体験をしながらラッサール神父と過ごされました。その貴重な証言を頂き本当に有難う御座いました。

会場の皆さんの中にも、献堂当時の貴重な体験やエピソードをお持ちの方が居られると思います。この50周年を機会に是非、その内容を教えて下さい。資料、写真、メモ、何でも良いです提供願います。本日は有難う御座いました。

(後記)

この度の企画を実行するにあたり、今更ながら50年の歳月は大きいと思いました。

人選をしている中「あの方が生きておられたなら・・・残念!」との声を幾度も耳にした。

岩国教会の風呂井さんは、都合で出席できなく残念がられていました。(丁度、当時の出来事の編集に手を着けるところだったそうです。)

ご出席くださった4人の方々のご高齢にも関わらず、ラッサール神父のお人柄の話となると鮮明に記憶が蘇られているようでした。

司会の田淵氏が『直接的に献堂に連がる話』へ持ち込もうと懸命に仕向けているのだが、面々の方々は、ひたすら『神父のお人柄』を生き生きと語られる。『神様はラッサール神父という逸材と聖堂を通してメッセージを、託されたのだらう』と感じ入ってしまった。

その貴重な聖堂を継承している私達は50年間、平和について何を祈り、何を語って来たのでしょうか?津野さんのお言葉が、胸に突き刺さるようです。そして、浄財を贈って下さった世界の方々に何を答えて行けばよいのでしょうか?我が広島教区だからこそ出来る、やらなければならない事は何なのでしょう?

『ラッサール神父の話』を聞かせて頂き、『熱き想い』に触れる事がそれらに気付くエネルギーの一片にでもなれば幸いです。

なお、編集の都合と私の不精の責で、お聞きした内容を正確に全てはお伝えする事が出来ませんでした。各地区センターに配布されている、当日のビデオテープをご覧になる事をお勧めいたします。

文責: 野間 泰治(幟町教会・平和活動部会)

世界平和記念聖堂献堂50周年 を迎える祈り

【今月の祈り】

5月の意向

「復活せるキリストの勝利とその平和とは、人間の作り為した廃墟より生る」

本祭壇南側に面する香部屋の奥に、縦・横・奥行き共に50cmは優に超える大きな、金属製の聖櫃があります。1953年、ドイツのボン市から広島市に寄贈されたものです。

この聖櫃の4面にレリーフが施されています。左面には創世記に登場する蛇と木の実が、右面には洪水後、神の約束のしるしとして示された虹が描かれています。前面は、地球を思わせる緩やかなアーチの上に、廃墟となった街が右に、3つの十字架が左に描かれ、その上を、傷跡を残している大きな両手が覆っている絵柄です。背面にはドイツ語と日本語で刻まれた上記の言葉が表現されているのでしよう。

私たちは原爆による破壊とそこからの復興を通して、キリストの過ぎ越しに与っています。絶望の間を知るものは復活の喜びをも体験するという希望を、私たちの生き方を通して証しする恵みを祈りましょう。



聖櫃の梱包を解いた時の写真。右からラッサール神父、シュワイツェル神父、萩原教区長、トラー神父と子供たち

(聖書の言葉)

わたしたちすべてのために、その御子をさえ惜しまず死に渡された方は、御子と一緒にすべてのものをわたしたちに賜らないはありますがありませんか…

(ローマの信徒への手紙 8章 32～39節)

(黙想)

(祈り)

いのちの源である神よ、世界平和記念聖堂の献堂50年にあたって祈ります。人間は歴史を通し、自らのエゴと傲慢が引き起こす戦争によって、生きていけるもののいのちとその生活の場を破壊する行為を繰り返してきました。戦争は人間のしわざです。しかし、多くのいのちが死に絶え、灰燼と帰した地に、あなたのいのちが息づくことを私たちは信じています。憎しみと暴力に満ちた人間社会の罪の縄目の中で、十字架上の死に身を投じた御子キリスト・イエスが、悪に踏みにじられた死を通して、和解といのちに移られたからです。

御子のうちに示されたあなたの限りない慈しみを心に留め、感謝いたします。イエスのいのちに与って私たちも、自分たちの身の周りに、また世界全体のために、報復ではなく和解を、権力ではなく正義を、憎悪ではなく慈愛を選びとり、平和を実現していくことができますように、知恵と勇気と賢明さをお与えください。

私たちの主イエス・キリストによって。アーメン



「今月の祈り」は援助修道会が担当しました。

資料紹介

この本は、1946年5月に米国の従軍記者として広島に来たピュリッツァ賞作家ジョン・ハーシーの史上初の原爆被害記録である。この記事は、アメリカの雑誌、ニューヨーカー誌に同年8月31日号に掲載され、一大センセーションを巻き起こした。第1章から4章では、6人の被爆者の体験と見聞をリアルに描き、第5章(増補版)で、85年に再訪し、6人の被爆者の戦後史をヒューマンな筆致で跡づけている。

特に、被爆直後の幟町教会の様子をクラインゾルゲ神父(帰化名 高倉 誠)の証言を元に生々しく伝えている。

訳者の一人である谷本清は、流川教会(広島メソジスト教会)の牧師で、ヒロシマ・ピース・センターを設立し、原爆で傷ついた少女達や孤児の救済に長年にわたって取り組まれ、広島平和文化センターの理事長をされた方です。幟町教会で被爆し、縮景園に避難していたラッサール神父、シッファー神父などの救出に大活躍された恩人と言えます。

「ヒロシマ」[増補版]

ジョン・ハーシー著

(石川欣一、谷本清、明田川融 共訳)

(1949年4月25日 初版第1刷発行)

(2003年7月22日 増補版第1刷発行)

(A5版 244ページ)

発行所：財団法人 法政大学出版局

<内容>

1. 音なき閃光

2. 火災

3. 詳細は目下調査中

4. 黍^{きび}と夏白菊

5. ヒロシマ その後

(1977年11月19日に亡くなられたウィルヘルム・クラインゾルゲ神父の原爆症との戦いが記されている。)

部会報告

<総務部会>

常任委員会を開き、平和行事実行委員会委員と8月5日の平和行事と献堂ミサの役割分担を話し合った。当面、平和行事の案内文について調整する。

<霊性・典礼部会>

第5回部会を開催した。前回に引き続き、8月5日の献堂記念ミサの式次第や典礼について話し合った。また、巡礼の受け入れについて聖堂案内係の人と協議した。

<平和活動部会>

聖堂スケッチの募集案内書を作成し、広島教区内の小教区やミッションスクール、幼稚園に呼びかけを始めた。平和学習は、7月4日、9月5日、11月7日の全3回を予定し、内容、人選は調整中。平和の歌の募集は、10月10日を締め切り期限として募集要綱を作成中。

<編集後記>

- ・献堂ニュースで紹介する写真や資料は、これまでに見たことのあるものばかりで、物足りない感じは否めません。「求めよ、さらば与えられん。」表紙の写真は、広島市が発行している本の中にありました。もう一度、あなたの周りの資料を見直してください。新たな発見があるかもしれません。
- ・3月21日付けのカトリック新聞「展望」欄に岡山教会の後藤神父が寄稿されています。私たちの平和を考える一つのテーマです。是非とも皆さんで話し合ってみてはいかがでしょうか?(K・A)

献堂50周年ニュース

vol. 01 5月号(No.4)

2004.05.01 発行

(編集・発行)

カトリック広島司教区

世界平和記念聖堂献堂50周年実行委員会

常任委員会

〒730-0016 広島市中区幟町4番42号

Tel 082-221-6017

ホームページ <http://www.hiroshima.catholic.jp/>